

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 94 号 令和2年(2020年) 3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



『大坂神戸兵庫漆大津浪之新聞』

当館資料の欠部分(左半分)を兵庫県立歴史博物館所蔵の資料画像で補っています

神戸港の「大津波」

当館の貴重書庫に『大坂神戸兵庫漆大津浪之新聞』という資料があります。そこには、明治四年五月十八日(新暦の七月五日)「車軸を流すような豪雨」と暴風による高波が神戸に押し寄せ、停泊中の外国船や多くの船が陸地に打ち上げられ、外国人居留地の商館や人家に甚大な被害を与えたことが記されています。

国立公文書館蔵『兵庫県史料』によれば、この時の波の高さは一・五メートルを超え、被害を受けた船は三百七十艘余り、居留地以西の建物で被害を受けなかった建物は一つとしてありませんでした。開港後、急速に築造が進められていた波止場、居留地や荷揚棧橋の石垣は九割がた破損(損失額七千二百両)しましたが、復旧にあたっては、六千二百両の追加額をもって改造工事が行われることとなりました。

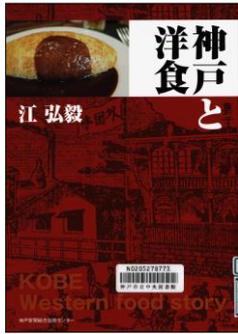
明治期、神戸港は幾度も台風や高波に見舞われたと記録されています。しかし、そのたびに復興を重ね、国際的な港としての礎を築いていきました。

参考文献：荒尾親成『明治・大正 神戸のおもかげ集』(中外書房)他

神戸と洋食 江弘毅編（神戸新聞総合出版センター）

神戸に根付いた洋食文化の歴史は開港に端を発する。西洋から入ってきた肉食文化は文明開化のシンボルとして一気に広がった。

「日本仏料理の父」フランス人ルイ・ペギューが居留地に開業した「オリエンタルホテル」のレストランは、国の内外で絶賛され、その味は多くの料理人によって今も引き継がれている。本書では、外国航路の客船のコックたちが上陸してもたらした料理、新しい洋食を模索し進化する店など、神戸の洋食が様々な角度から語られている。豊富な料理の写真とともに十五店舗の紹介もある。



グルームさんのある一日―神戸居留地ものがたり 宇津誠二制作

明治中期、六甲山に別荘地やゴルフ場を造り「六甲山の開祖」と呼ばれたのが、タイトルにもあるA・H・グルームである。

彼が残した一枚のスケッチからインスピレーションを得た著者は、絵に描かれている人物を中心に、明治九年の米国独立百周年の記念すべき一日を描き出した。物語のなかでは国籍に関係なく記念日を祝う人々の姿や、盛り上がる神戸の街の様子が生き生きと語られる。

ひょうごで出会う野鳥 西播愛鳥会編著（神戸新聞総合出版センター）

県を代表する鳥コウノトリをはじめ、身近な留鳥や、夏鳥と冬鳥、春や秋に通過する旅鳥など、豊かな自然環境に恵まれた兵庫県で観察できる野鳥のうち二〇六種がカラー写真とともに紹介される。鳥たちの四季折々の暮らしぶりなど、野鳥を知るためのコラムも充実。

西区に出現した迷鳥サバクヒタキ、姫路市の民家に訪れたカラムクドリなど、県内で見ることが稀な珍鳥が近年観察された事例まで記してあるのも鳥好きには嬉しい。

仮設住宅3万戸―阪神・淡路大震災神戸市仮設住宅担当者 募集・入居事務奮戦記 秋定敦著・発行

平成七年に兵庫県南部を襲った地震で、神戸市では最大二十三万人が避難所生活を余儀なくされた。その状況下で、著者は市職員として仮設住宅の募集・入居の事務を担当し「早く、大量に」住宅を市民に提供することを求められる。国や県と市民の要望に挟まれ、忙殺された日々の記憶を後世に残すため、少しずつ書き溜めて五年をかけてまとめた。

差異の美学―神戸文化と神戸ビエンナーレ 大森正夫、神戸ビエンナーレ組織委員会事務局編著（出版ワックス）

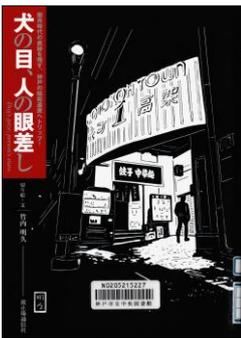
神戸ビエンナーレは阪神・淡路大震災の後、経済の復興から文化の復興をめざす総合芸術イベントとして、二〇〇七年から隔年で五回開かれた。公募展方式、実行委員会による運営、港町らしく野外でコンテナを使う展示、現代美術以外に生け花や園芸を取り込むなど、新しい芸術の形を追求した。この活動を支えたアーティストたちの言葉で活動を振り返る。

新五国風土記―ひょうご彩祭 神戸新聞社編（神戸新聞総合出版センター）

兵庫県の祭りや風習などの伝統行事、食文化の「今」を地元の人に取材を重ね書き記した。

話題は、「親族総出、祝うハレの日」「ドラクエとおにぎり」「お地藏さん』『はしご』の夜」「丹波の足立さん」「魔よけのコトノハシ」など、ユニークなコトノハシが並び、日常を飾らず写した文章と写真には温かみがある。

過疎化や伝統文化の衰退が多く地域に見られるなか、人々が伝統を暮らしの中で楽しみ大切に思ういや柔軟に形を変えつなげていく姿を強く感じる。



「ごろごろ、神戸。」 平民金子（びあ株式会社関西支社）

著者は、神戸の中心部から少し離れた場所にある商店街や町並みに惹かれて神戸に移住し、子育てを始めた。湊川界隈や水道筋の商店街から、王子動物園や須磨水族園、大丸神戸店の屋上まで。子どもを乗せたベビーカーをごろごろいわせながら訪れた場所、出会った人々など、日々の生活が描かれた短編エッセイ集である。

本書には、二年にわたり神戸市広報課のサイトで連載されていたものに加筆されたものと、それについての作者の感想がB面として収録されている。

神戸残影 久元喜造（神戸新聞総合出版センター）

現役市長による随筆集。神戸で過ごした少年時代を振り返り、市電での人情味ある会話や、裏山で野犬の群れに遭遇し息を殺してやり過ごした経験など、記憶を鮮やかに蘇らせる。また、お好み焼きや近海の魚といった食の話題、古くなった船やトーテムポールを敬意をもって移設・撤去して風景を再生させたこと等、テーマは幅広い。

吉岡充水彩画集―播磨と神戸と阪神と 吉岡充（三帆舎）

神戸市在住の画家が兵庫県の街並みを描いた画集の第二弾。宝塚歌劇場や甲子園球場、風情ある民家や商店街など、前作以降の二三点が収録されている。今はなきポートピアランドなど、時代と共に変わりゆく風景も楽しめる。細やかなタッチと色づかいに、写真とはまた違う温かみを感じることが出来る。作品ごとに添えられたその場所に対する著者の思いが窺える紹介文にも注目してみてほしい。

犬の目、人の眼差し 竹内明久 切り絵・文（波止場通信社）

戦後の闇市がルーツといわれ、当時の名残を留める元町高架通商店街、通称モトコー。ダイブで個人的なこの商店街も阪神・淡路大震災やJRとの契約問題などの影響で店舗の移転、閉店が続ぎ、急速にその姿を変えつつある。コピーライターであり、故・成田一徹に師事し、切り絵を学んだ著者が日々歩いて目にした風景や店主の姿から移り行くモトコーの今を切り絵とエッセイで綴る。

一九三〇年代モダニズム詩集―矢向季子・隼橋登美子・冬澤弦 季村敏夫編（みずのわ出版）

絵葉書で見えるタイムスリップ―明治・大正・昭和―神戸市ほか 兵庫 県編VOL.1（絵葉書資料館）

神戸 近代都市の過去・現在・未来―災害と人口減少都市から持続可能な幸福都市へ 池田清（社会評論社）

神戸モダンの女 大西明子（編集工房ノア）

神戸 その18
あんな人こんな人

中山 岩太 なかやま・いわた
明治28年(1895) ~ 昭和24年(1949)

中山岩太は、大正7年に東京美術学校臨時写真科を卒業後に渡米、ニューヨークで写真館を経営して活躍します。大正15年、パリに渡り、藤田嗣治ら^{そうそう}錚々たる芸術家たちと親交を得て、欧州モダニズムの最先端の動向に接します。帰国後は、芦屋カメラクラブを結成し、当時世界的に隆盛していた前衛的・実験的写真表現を实践する新たな写真芸術活動を行い、昭和5年に「国際広告写真展」へ出品すると、独自の構成的モンタージュ作品《福助足袋》が、商業美術や写真界に衝撃を与え、その後の広告文化に大きな影響を及ぼすことになりました。

昭和5年鯉川筋に開かれた「画廊」では、中山が興した神戸商業美術研究会の展覧会が開催され、そこに集う芸術家や文化人達の交流が盛んに行われました。また昭和11年に開設された神戸大丸写真室を引き受けた中山は、経営的手腕を見せて幅広く活躍し、耽美的な作風と共に、高度な技術水準によって多くの支持を得ました。「私はいつでも美しい写真を追及している」という信条を生涯貫き続けた芸術家でした。



中山 岩太
『中山岩太』
(淡交社)

参考文献：松實輝彦『広告写真のモダニズム―写真家・中山岩太と一九三〇年代』（青弓社）他

神戸税関庁舎

神戸税関の起源は幕末の運上所にまで遡ります。安政五年の日米修好通商条約により、慶応三年、神戸は開港します。イギリス人J. W. ハートの作成した『居留地計画図』の右側やや下の区画されていない部分に運上所 (CUSTOM HOUSE) が表示されています。



『居留地計画図』(1870)に描かれた運上所の位置

運上所の建物はモダンな和洋折衷で、ガラス窓が美しく当時の人々を驚かせ「ビードロ屋敷」と呼ばれたそうです。「運上」というのは商工業者が払う現代でいう「取引税」に当た

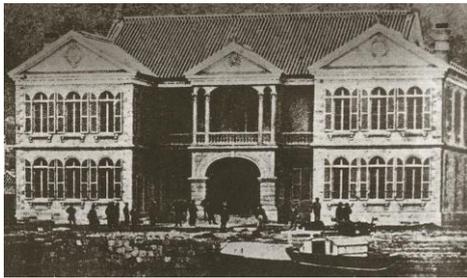


「神戸税関発祥の地碑」
運上所開設から130年を記念して平成9年に運上所跡(現在の神戸地方合同庁舎付近)に建てられました

る税金です。

明治五年十一月二十八日に全国の運上所が名称統一され、神戸運上所も明治六年一月四日に「神戸税関」と改称されました。初代庁舎は、旧運上所の建物を取り壊して建設され、石造二階建て、翌年一月二日開庁しました。

大正十一年二月、初代神戸税関の建物は不慮の火事で焼失します。記録的な寒波襲来のため水道の水が凍るなど消火活動は困難を極めたそうです。同年十一月、跡地には木造の仮庁舎が建てられました。



神戸税関初代庁舎
『神戸税関120年の歩み』より

そして、新突堤が海を埋め立てて建設されたことを機に、二代目庁舎が旧庁舎のやや東、現在の場所に建設されます。大正十二年に着工し、

昭和二年に竣工、敷地面積一四二〇坪、建築面積七五四坪、延べ床面積二九七八坪、地上四階地下一階、塔屋付、耐震耐火構造鉄筋コンクリート造の建物で、御影石・タイルを使用、総工費約二二〇万円(現在で約二兆円)がかけられました。



2代目神戸税関庁舎
『神戸税関廳舎新築概要』より

昭和十八年十一月、第二次世界大戦のため神戸税関は閉鎖。終戦直後の昭和二十年九月から連合軍に接收されますが、昭和二十五年四月一日から庁舎の使用が認められ、庁舎において税関業務が再開しました。

第二次世界大戦でも庁舎そのものに被害は出ませんでした。老朽化に加え、阪神・淡路大震災の損傷により庁舎の建て替えが検討されます。時計塔のある外観を残してほしいという市民の声を考慮して、平成八年四月、本館の改修と隣接する二つの分館の建替工事が始まります。建物

は地下一階地上十階建ての鉄骨鉄筋コンクリート造で、平成十年十一月二十六日完成落成式が挙行され、翌年から三代目庁舎において業務が始まりました。

二代目の庁舎部分は旧館として保存され、税関の役割や歴史を紹介する広報展示室が一般に公開されています。新築部分は、船のマストや船長室をイメージしたデザインで全体が神戸港に入る巨大な船に見えます。業務機能を維持しつつ近代の歴史的建造物を保存活用していく神戸税関は、公共建築賞をはじめとして数々の賞を受賞しています。



北西から見た3代目神戸税関庁舎。北東からは、2代目庁舎の姿を偲ぶことができる

参考文献

『神戸税関百年史』『神戸税関120年の歩み』他